

タマサート大学留学に関するレポート

高知工科大学 3年 板垣 毅

私は 2005 年 6 月から 10 月までの 5 ヶ月間、高知工科大学の姉妹校であるタイ王国国立タマサート大学に交換留学生として留学をした。この期間は前期課程にあたり、私は授業が全て英語で行われるシリンドーン国際工学部(Sirindhorn International Institute of Technology、以下 SIIT)に籍を置いた。留学の目標は英語の習得と異文化交流である。

履修科目について、Digital Circuit、Industrial Electronics、English for Engineering の 3 科目を履修した。Digital Circuit では主なデジタル回路の動作と動作原理からそれらを用いた組み合わせ回路の作成などを、Industrial Electronics では各種コンバーターの原理から応用までを学んだ。また English for Engineering では英文の概要を即座に把握する方法、工学的な論文や説明文の書き方などを学んだ。授業が全て英語で行われることに初めは抵抗があり未知の単語が多く苦労したが、多く使われる用語を一通り把握した後は英語にも慣れ、授業を理解する事ができた。SIIT の学生らは入学したときからずっとこの形式の授業をうけているので数学的、工学的な単語に関する知識がかなり高く英語に関する抵抗がなかった。これは将来国際的に活躍できる研究者を育てることに有効だけでなく、留学生に対する敷居も低く受入れも容易にするという利点もあることに感心した。日本では東京工業大学が修士課程においてそういったコースを設けているのみで、学士課程で採用している大学は無いようである。

在学中においては学生、スタッフなどの多くのタイ人だけでなく私と同じく SIIT の短期または長期の交換留学生であるアメリカ人、ドイツ人、フランス人、フィンランド人、マレーシア人、ミャンマー人などとも交流することができた。価値観が大いに違う彼らと話をすることでとても有意義で、私は色々な考え方や思想を知ることができ視野を広げることができたし、それによって自分の価値観、人生観が受けた影響は少ない。コミュニケーションは英語でとっていたが、その上で必要なのは難しい単語ではなく難しい単語を簡単に表現する能力であると実感した。わかるに越したことはないが母国語が英語でない相手の場合は難しい話をするとうとうもどちらかが知らない単語もあるので、それを簡単に説明できるとコミュニケーションがスムーズに行えるし、難しい単語、ネイティブの慣用句を多用するよりもスマートである。日本で英語の授業に英英辞書の利用を薦められても使う気にはなれなかったが、今回の留学を経験して使いたいと思うようになった。

またタイ滞在中は生活を通じてタイの文化に触れることができ、それは同時に日本の文化と比較し、日本を客観的にも見ることに繋がった。信仰を持たない人が多い日本とは違いタイでは 9 割以上が仏教徒であり、彼らにとっては信仰を持たないことが不思議らしくその理由をしきりに尋ねられた。私はいつも「信仰を持たないことに特に理由がないが何故仏教を信仰するのか」と逆に尋ねていたが帰ってくる答えは「わからない」「特に理由はない」といったものであった。しかし彼らはとても敬虔で信仰を大事にしている。タンブン(徳を積む)という言葉をしきりに聞いたが、彼らに

とって日常生活での善行は即ちタンブンで仏教徒として徳を積むことである。これがタイ人の親切さに繋がっているのかなと感じ、初めて宗教に興味を持った。

産業について、タイでは観光業、農業、繊維業などが主な産業である。特に観光業は強く、タイは国際的な観光地として成功している。確かに南部プーケットや赤道に近い島々がリゾート地として素晴らしいロケーションであったり、世界遺産にも指定されているアユタヤー、スコータイといった歴史ある建造物があったりと有利な点が多いのもあるが一方ではちょっとした滝が観光地として成功していたり、大都会バンコクに対して貧しさの残る北部、東北部ではトレッキングや生活体験を売りにしていたりとタイの観光開発の巧みさを目を見張るものがある。タイ人やその他の外国人に日本は観光地としてどうかと聞いてみたが出てくるのは東京と富士山だけで日本は観光地としてはやはり魅力がないということだった。日本には観光地として魅力ある素材はたくさんあるが活かせてないのが残念だと感じる。一方工業に関して、タイ国内における工業製品はほとんどが日本の企業のブランドであった。タイブランドのものもあるが扇風機などの簡単な製品ばかりで精密機器や車などは皆無であった。また細かいところではボールペンなど文房具も日本製のものはとても質が良いとタイの学生に人気があった。日本が技術大国であり優れた技術を持っているというのはわかっていたのだがタイに来て改めてその凄さを感じ、同時に日本の技術が世界中で使われている、技術で世界を席巻しているこの立場を失いたくないと感じた。そしてやはり将来自分がその一翼を担えればと改めて自らの目標を見据えることができた。

総じて、この留学を通して得られたものは私が期待していた以上に多く、この 5 ヶ月の留学はとても有意義であった。色々あったが一番大きいのはやはり人との出会いである。価値観、人生観が大きく違う彼らとの真面目な話、くだらない話を通して得られたものの価値は計り知れないしこれからも彼らと友人として付き合い続けるのは自分の人生において大きな財産である。また彼らと語り合ったテーマで一番楽しかったのは「豊かさ」である。私はよく「日本人は世界で一番金持ちなのに自殺者がとても多いのが不思議だ」と言われた。確かに日本は先進国であり、様々な面で発展しているし経済面では世界の中でもトップクラスである。一方タイは発展途上国であり、周辺の後進国と比べれば突出しているが貧富の差も激しく経済的にも決して豊かとは言えない。しかし、人を見てみると彼らはとても気さくで明るく、細かいことに拘らず、また活発でエネルギッシュだ。平日であってもほぼ毎日学校が終われば色々な活動をする。特にそういったクラブに参加しているわけではなく有志で釣りに行ったり、サッカー、テニス、バドミントンなどスポーツをしたり、連休には学生が企画して大勢のクラスメイトで旅行に行ったりする。とにかく活動的で彼らと過ごす日々は退屈することなくとても楽しかった。そしてそういった日々を通して感じたのは「豊かさ」である。人と人とのつながりが深く、よく笑う彼らの日常生活は充足していて、人生を謳歌しているという表現がぴたりと当てはまる。日本での生活が再開したが、タイで得た様々なことを胸に豊かな日々を過ごしていこうと決意を新たにした。